

### 富士山あれこれ

## 山頂の鐘(続)

『博物館だより(MARUBI)』37・38号で、富士山頂にあった鐘について掲載しましたが、その後、別の鐘の存在が明らかになりましたので、「山頂の鐘(続)」として報告します。

### 善龍寺の喚鐘

その鐘は、静岡県御殿場市の浄土宗寺院である善龍寺に保管されているもので、「善龍寺の喚鐘」という名称で昭和47年に御殿場市の有形文化財に指定されています。(※1)

寺の山門の脇に立つ説明板には次のようにあります。

「この喚鐘は、寛延2年(1749)江戸の富士講の人たち(京橋講中・神田講中)によって富士山頂の浅間大神宮に寄進されたものだが、明治の廃仏毀釈の際に

中畑の有志らによって善龍寺に移された。太平洋戦争のとき供出されたものの、当時の警防団員の機転で鑄潰されるのをまぬがれ、終戦と同時に寺に戻り、現在、本堂内に置かれている。」「高さ66cm 直径37cm 重量 約34kg」

本堂の奥の位牌堂に下げられている鐘をみせていただいたところ、胴部全体にわたり刻銘がありました。正面には

「富士浅間大神宮 寛延二己巳

年 六月吉日 京橋講中 神田講中 高村源太夫 真部七右門(ママ) 藤田屋弥七 はりまやいわ 川嶋金助 中田平兵衛」

とあり、以下、胴部周囲に奉納者名が続きます。説明文にあるとおり、この鐘は寛延2年(1749)6月に京橋講中と神田講中により「富士浅間大神宮」に奉納されたもののようです。その後、明治の廃仏毀釈の際に富士山頂の浅間大神宮から善龍寺に移したとのことですが、山頂

にある浅間神社は、江戸時代までであった大日堂が明治になって奥宮として出発したのが最初で、それまで浅間神社はありませんでした。したがって、ここに記された「富士浅間大神宮」というのは、建物としての富士浅間ではなく、富士山の本尊である富士浅間大神(富士浅間大菩薩)そのものに奉納されたものと解釈するべきでしょう。



■善龍寺の喚鐘

## 山頂の鐘(続)

### 【鐘銘】

富士浅間大神宮  
京橋講中  
神田講中  
高村源太夫  
真部七右門(ママ)  
藤田屋弥七  
はりまやいわ  
川嶋金助  
中田平兵衛

駿河屋善右門(ママ) 山腰喜八 澤田利八  
山田傳六 金子佐兵衛 渡美弥市

小畔甚七  
亀屋勤右工門  
池村屋ハ右門(ママ)  
伊勢屋清左右門(ママ)  
佐野屋五兵衛  
佐くわん荘八  
長井治良兵衛  
伊達屋六兵衛  
山田佐右門(ママ)  
幸村かつ五郎  
さかなや伊兵衛  
山本与惣治郎

久保田口  
小泉吉代  
岩林五良兵衛  
今口口兵衛  
久保田安治郎  
吉治郎

東口高村助ハ旦家  
大坂屋平右衛門  
泉屋甚右門(ママ)  
口口甚五兵衛  
相模屋口兵衛  
口口屋口口郎  
同 口兵衛  
真部平右門(ママ)  
飯村莊右門(ママ)

世話役

三谷勤四郎 口口弥兵衛  
杉浦藤七 小池金左右門(ママ)  
村田長右工門 龜田新八  
左官庄九郎 川田武右門(ママ)  
丁二屋喜右工門 守屋市兵衛  
山本長右工門 関口佐平次  
瓦屋重兵衛 平野間七兵衛  
瓦屋九兵衛 高田五良右門(ママ)  
仏師源兵衛 栗原宇兵衛  
左官六兵衛 福原権十良  
鍛冶屋仁左工門 清水権七  
伊勢屋権兵衛 稲葉傳治良

玉屋幸助 高橋市右工門 川田次兵衛  
室町吉兵衛 澤田定右工門 万屋仁兵衛

山口屋卯兵衛  
長次郎  
加藤金藏



■善龍寺 山門

## 須走口との関係

今回紹介する鐘はどのような経緯で奉納されたものなのでしょうか。残念ながら、そのあたりがわかる言い伝えはないようです。そこで、鐘の銘文を検討してみました。

鐘の裏にあたる面に「東口高村助ハ旦家 大坂屋平右衛門(以下略)」と刻まれています。「東口」の「口」というのは、富士山の登山口のことです。江戸時代には、富士山の登山口として、駿河国の大宮村山口、須山口、須走口、甲斐国の吉田口、の4口がよく知られており、富士山をぐるりと取り囲むそれぞれの登山口は方位をもって称されることもあり、『駿河志料』(※2)では「登山道路」として、

南口は村山口、東南口は須山口、東口は須走口、北口は吉田口としています。また、寛保元年(1741)に記された『駿州駿東郡須走村鑑帳』(※3)には「須走村之儀は富士山東口にて」とあるように、ここに刻まれた「東口」というのは須走口(現・静岡県駿東郡小山町)のことであると思われます。

次に続く「高村助ハ旦家 大坂屋平右衛門」というのは、大坂屋平右衛門以下を旦家を持つ高村助八ということなので、須走口で富士山に関わる旦家を持つ人物といえ、御師であろうと考えられます。また、正面に刻まれた「京橋講中 神田講中 高村源太夫」にある高村源太夫

も、名前の刻まれた位置がそれに続く「真部七右門(ママ)」などの講中の構成員よりも上部にあることから、この人物も京橋講中や神田講中の真部七右門以下を旦家を持つ御師であると解釈できます。

この銘にある高村助八及び高村源太夫が本当に須走口の御師であるのか史料を探してみました。この鐘が奉納される2年前の延享4年(1747)に須走村の御師一同が取決めた「相究申連判証文之事」(※4)という文書に15名の御師が連名で記されていますが、その中に「高村助八」「高村源太夫」の名前がみえたので、この二人は須走御師であることは明らかといえます。

## 鐘の設置場所

以上のように、本鐘は、須走口の御師の旦家が奉納したものであることがわかりました。

では、この鐘は富士山頂のどこに設置されていたのでしょうか。そこで、山頂において須走御師の関わる場所を探してみました。

貞享3年(1686)4月の須走村名主・組頭の書上げた「富士山諸役所小屋迄之書付」(※5)によると、須走口吉田口登山道の頂上である薬師ヶ岳には、須走村の者たちが経営していた「薬師岳小屋」が合わせて16軒あると記されており、そして、「富士山登山道行合より八葉之内」(須走口登山道と吉田口登山道が合流する八合目大行合か

ら山頂)は大宮浅間社(現・富士宮市の富士山本宮浅間大社)の支配ではあるが、「薬師初穂」として薬師堂に納められた賽銭を受ける権利、及び「御内院之散銭」として火口に投げ入れられた賽銭を大宮浅間社に次いで二番目に取得する権利は前々から須走村にあることを記しています。

また、元禄16年(1703)の須走村と大宮浅間社との争論では、山頂を支配しているとされる大宮浅間社が須走村にことわりなく上吉田村の者に薬師岳に小屋を建てさせる許可を出したことに抗議し、その結果、上吉田村の者に小屋を出させないことで示談が成立しています(※6)。

このように、富士山の八合目の大行合から上は大宮浅間社の支配であるとの認識があったものの、薬師岳の周辺には古くから須走村の権利が一定程度及んでいたことがわかります。そのような山頂の状況から考えると、この鐘が須走御師を通して山頂に奉納されたものであるならば、その場所は博物館だよ

り37・38号で述べた吉田須走拝所とするのが妥当と思われる。

明治の廃仏毀釈の際に中畑の有志によって善龍寺に移されたということなので、37号の表紙に掲載した錦絵『大日本富士山絶頂之図』(安政4年・1857)に描かれている拝所の鐘は、この鐘かもしれませんね。

## 須山口の鐘

須山口(現・静岡県裾野市須山)の山頂付近にも鐘があったようです。須山口は聖護院道興の「廻国雑記」文明18年(1486)の条に「すはま口」とあるように古くからの登山口ですが、宝永4年(1707)の噴火に伴い一時廃道になり、その後再興しています。

この須山口を利用して富士登山した記録『富岳雪譜』(※7)に鐘のことが記されています。『富岳雪譜』は、和久田寅が享和3年(1803)の夏、友人と須山口から登山し、須走を下り、足柄、小田原を経て江戸へ出るまでの富士登山記です。八合目を過ぎ

て胸衝(むなつき)をよじ登っていくと、「夫ヨリ鐘掛トイフトコロアリ コレ巖間ニ木ヲ横ヘテ半鐘ヲカケタル処ナリ 此ヲ過レバ程ナク山ノ巔ニ登」とあり、鐘掛といって、岩と岩の間に木の棒を横に差し渡し、そこに半鐘が掛けてある場所があり、そこを過ぎるとすぐに山頂であるとしています。

同じく須山口を登山した旅行記『五山駢程見聞雑記』(※8)にも、須山口の鐘のことが記されています。これは筆者不明の旅行記で、天保9年(1838)旧暦7月に江戸をたち、遠州掛川に赴き江戸に戻るまでの途中、雨

降山、富士山、秋葉山などに参詣登山を行っています。富士山には須山口から登っており、山麓の須山の神職土屋平太夫宅を出発し、十文字、馬返シ、一合目と登り、五合目の室に泊まり、翌朝、頂上に達しています。「頂上の上り口に半鐘あり。たたきみるに、音声発しがたし」とあり、須山口登山道の頂上に登り詰めた所に半鐘があって、打ち鳴らしてみたものの音が良く出なかったと記しています。

天保11年(1840)から弘化3年(1846)までの間に制作されたと考えられる『富士山明細図』(※9)には、須山口登山道

の頂上の様子が描かれています。中央が平坦になっていて、そこには銀名水と呼ばれる井戸があり、火口の淵には鳥居が立ち、「影拝所」と表記がされています。他の登山口と同様に、それは拝所の鳥居であり、そこは「須山ノ拝所」(※10)と呼ばれていた所でした。この図には鐘は描かれていませんが、きっと「頂上の上り口」の岩と岩に渡した木の棒に掛けてあって、須山口登山道を登ってきた登山者が打ち鳴らしていたことでしょう。

## おわりに

先にも述べたとおり、江戸時代には富士山の登山口として、駿河国の大宮村山口、須山口、須走口、甲斐国の吉田口、の4口がよく知られていました。大宮口は途中、村山口と合流し同じルートを通して頂上に至るので大宮村山口と称され、須走口は吉田口と八合目の大行合で合流し、同じ道を通して登頂します。須山口はそのまま頂上へ至ります。このように、最終的には3筋の道が頂上に達することになりますが、3道の頂上に

は拝所があり、それぞれ大宮村山拝所・吉田須走拝所・須山拝所と呼ばれていました。そしてこれら全ての拝所のそばには鐘が掛けられ、登山者によって打ち鳴らされていたことが明らかになりました。

拝所から鳥居を通して拝む行為、鐘を打ち鳴らす行為、これらは信仰登山の最終目的地である山頂において行われる宗教行為として不可欠のものであったと考えられます。

(付記)

※善龍寺の向山瑞成住職ならびに御殿場市教育委員会の勝俣竜哉氏にはたいへんお世話になりました。また、御殿場市の和光弘氏には貴重な情報をいただきました。記してお礼申し上げます。

(註)

- ※1 文化財のしおり第30集『新版 御殿場の文化財』御殿場市教育委員会 平成13年(2001)
- ※2 中村高平 文久元年(1861)『浅間神社史料』昭和9年(1934)所収
- ※3 『小山町史』第3巻近世資料編ⅡNo58 平成6(1997)
- ※4 高笠利彦『近世須走村の二つの総論—富士参詣をめぐって』『小山町の歴史』第3号 小山町役場総務課 平成元年(1989) P67
- ※5 『小山町史』第7巻通史編 平成10年(1998) P472
- ※6 「一札之事」『小山町史』第2巻近世資料編ⅠNo518 平成3年(1991)
- ※7 『富岳雪譜』享和3年[1803]『江戸期山書翻刻叢書2』国立国会図書館山書を読む会 昭和54年[1979]
- ※8 『五山駢程見聞雑記』天保9年(1838)『江戸期山書翻刻叢書3』国立国会図書館山書を読む会 昭和55年(1980)
- ※9 『富士山明細図』富士吉田市歴史民俗博物館 平成9年(1997) P29
- ※10 『須山ノ拝所アリ』『隔録』文政8年(1825)『富士吉田市史』史料編第5巻近世Ⅲ 平成9年(1997) P268

(奥脇 和男)

# 富士山御師外川家に泊まった人々(後-3)

—『富士の道の記』の紹介—

菊池 邦彦(外川家調査員/東京都立航空工業高等専門学校教授)

「又案内のものに持たせしわらじを出し、是より下りハわらじ二足づゝはき、いざや下らんと思ひる(ぬカ)、頃八巳の時計り、そここ、御いきのいで、誠によき塩合なり」と互に悦び、茶屋の前よりくだりへかゝる、又下り道ハ小石交りの砂にて一足踏めばつとすべり、又つとすべりければ、其早き事坂上より物をころげるごとくにて、いつかわハ合目まで下りける、室の主出て、登山の首尾を祝し、又「病る二人りの人々ハいかゞぞや」と、尋ければ、「ミなく、登られしの方、少し過て登られければ、最早下り給ふらん」といふうちに、此人々も下り来つ、互に其つゝがなきを祝し、共々に茶漬など喰し、昨夜よりの泊料・損料・飯料・茶代まで夫々払へば、「先達、是ハ御土産に」と御肉を五つ我にあたへ、又案内の強力ハ是までの約なれば、人々布子ぬき捨返し、酒二合を調べて其労をねぎらひ、荷物てんぐに背負有、金剛杖に結付かづくありて、八人と共に此所を立出れば、案内の強力二人りとも、「是を右へとり下り給へハ、須走のはしり道、一合目までハ木立もなく、一いきに下りつらん、いざぎげんよく下り給へ、我らも是より吉田へ下らん、又いしあらバ来年」とあいぎやう持し捨詞に、甲斐と駿河へ別れければ、取あへず、

別れ行 甲斐と駿河の 八合目  
二合の酒に 暇乞ひして  
と言捨て、妻手の小道を走り下れば、

■史料

## 下山、そして別れ

さて、これより、頂上から下りにかかります。

〔一行は、御鉢廻りの無事を喜び合った後、〕また、案内の者〔強力〕に持たせた草鞋を取り出し、これより下りは草鞋を二足ずつ重ね履きして、さあこれから下ろうと思ひます。ころは巳の時〔10時〕位でしょうか、そこらじゅうに、〔急に〕御いき〔霧のことを富士山の息吹と表現したのです〕が立ち込めて来ました。〔これで頂上からの景色も見えなくなります。私たちは〕「誠によき塩合」〔食物の塩味がちょうどいいということ、頂上を一周し終わった時に、タイミングよく霧がでてちょうどよかった、ということをかけています〕と互に悦び合い、茶屋の前から下りへかかります。また、下り道は小石交りの砂〔いわゆる火山灰のスコリア〕で、一足踏めばつと滑り、また、つと滑るので、その早い事といったら、坂の上か

ら物が転げるようで、いつの間にか八合目まで下っていました。

ちょうど〔昨晚泊まった岩〕室の主人が出てきて、首尾よく登山ができたことを祝い、また、「病気の〔早朝、一緒に出発できなかった〕二人の方々〔作者が武士とっていた府中の社人〕はどうしましたか」と、尋ねると、「皆さんが登られたのち、少し過ぎて登られたので、もう下って来られる頃ではないでしょうか」と言ううちに、その二人の人々が下りて来られましたので、互にその恙なき〔無事〕を祝し、共々に〔八合目の岩室で〕茶漬など食べ、昨夜よりの宿泊料・〔布団などの〕損料・食事代・茶代〔酒代〕までもそれぞれ払い終わりました〔岩室の代金清算がこのように下山時に行われる場合があることは、これまで知られていませんでした〕。〔すると、くだんの武士が急に〕「先達、これは

御土産に〔差し上げます。〕」と御肉〔富士山で産する蘇鉄のような植物で、先に九合目の小屋で売っていました〕を五つ私にくれました。また、案内の強力はここまでの約束なので、人々は身に着けていた布子〔防寒用の綿入れ〕を脱いで返し、酒二合でもって、その〔二人の強力の〕労をねぎらいました。〔強力に持たせていた〕荷物は、てんでに背負う者もいれば、金剛杖

に結付ける者もいて、〔私と佐野の富士講五人、そして二人の武士合わせて一行〕八人は、共にこの場所を出発します。

案内の強力二人は、「この道を右へ下りなされると、須走〔静岡県駿東郡小山町須走〕のはしり道で、〔そのまま〕一合目までは木立もなく、一息に下るでしょう。さあ、気持ちよくお下りください。私たちも、これから吉田〔山梨県富士吉田市上吉



■砂走を下る登山者/絵葉書(大正中期~昭和初期)

## 富士山御師外川家に泊まった人々(後-3) - 『富士の道の記』の紹介 -

田]へ下ります。また、ご縁があれば来年[お会い致しましょう]。と、あいその良い言葉を言い捨てて、甲斐[山梨県側]と駿河[静岡県側]へ別れましたので、取あえず、  
富士山の八合目で、甲斐と駿

河に別れます、[わずか]二合の酒[頂上からわずか二合下ったところで、と掛けているのかもしれない]で暇乞いを済ませて、  
と、[私も]一首詠み捨てて、妻手[右側]の小道を走り下りました。

富士山北口の八合目は、「大行き合い」とよばれ、昔からこのように富士吉田[甲斐国]側と須走[駿河国]側に分かれる分岐点でありました。逆に言えば、駿河の須走口と甲斐の吉田口から登ってきた人々が行き合う合

流点であったのです。その意味で「大行き合い」なのです。  
さて、『富士の道の記』はこれ以降もまだまだ続きますが、長く連載をさせていただいた本稿は、ここでひとまず終了させていただこうと思います。

### 『富士の道の記』の発見

本稿の始まりは、前福岡教育大学教授の板坂耀子先生のホームページで、富士山吉田口の御師外川家に宿泊した様子が記録された『富士の道の記』という本が新潟大学附属図書館佐野文庫にあることを教えていただいたことが出発点です。その後、板坂先生が同大学の紀要に書かれた『『富士の道の記』について』[『福岡教育大学研究紀要第54号第1分冊』、2005年]を、ネット上で読むことができました。国文学の立場から近世の

紀行文を全国的に調査・研究なさっている先生が、『富士の道の記』をどのように評価なさっているのか、是非、板坂先生のご論考を参照していただきたいと思ひます。  
「読んでいて、実に楽しい」というのが、日本近世史の立場から富士山信仰を勉強しようという私の『富士の道の記』の感想です。たしかに、当時の人の書いたものを読むことは楽ではありませんが、本書の場合は同一人が書いていますので、たとえ

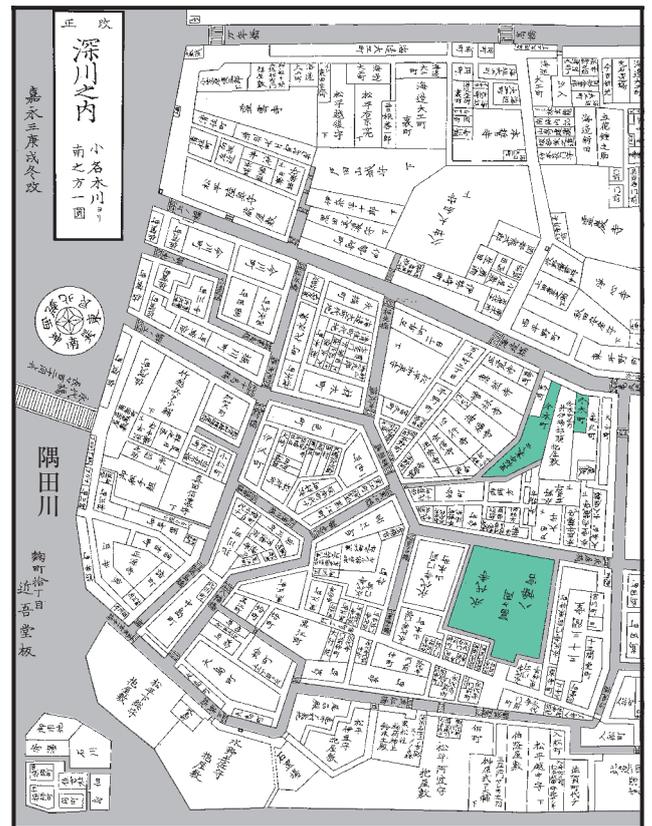
難読文字に出くわしても、同じ文字が繰り返し出てくることが多く、一般の地方文書と比べてヒントを得やすいのです。また、こんな所にもと思うくらい頻繁にルビが振られていて、これも参考になります。しかも、日記や書簡と異なり、この作者はこの本が不特定多数の人々に読まれることを意識していたと思うくらい、ルビの振り方を初め、

言い廻しや各場面に添えられる歌が、とても丁寧に書かれているように私には思われました。これで挿絵が入れば、木版本として市販しても相当売れる本になったのではないのでしょうか。  
私は、板坂先生と面識はありませんが、インターネットを介して、『富士の道の記』の存在を教えていただいたことを初め、その学恩は計り知れません。

### 作者は誰か

しかし、これだけの本を残した作者について、板坂先生は不明とされています。私もこの点に新たな発見はないのですが、富士山信仰を勉強する者として、一点だけ、若干の可能性を指摘しておきたいと思ひます。  
それは、本文の中で、猿橋宿に泊まる際、作者は、我が講は「全」であると書いていることです。富士講の講印と先達名を書き上げた「百八講印曼荼羅」(※)に「全 深川江川場 金之助」という記載があります。この江川場というのは、冬木町とその周辺地域をさし、現在の江東区冬木及び深川1丁目・2丁目に比定され、近世には干鯛問屋が集まっていたところのようです[平凡社『東京都の地名』703～704ペー

ジ]。嘉永3年[1850]の江戸切絵図「改正 深川之内 小名木川 南之方一円」を見ますと、深川には縦横に水路が走っているのが分かります。この水路を利用して干鯛などが九十九里辺りから運ばれたようです。隅田川にかかる永代橋の少し上流、左岸の通称仙台掘に入って、海辺橋と亀久橋の間の南側が冬木町です。丁度この南には富ヶ岡八幡宮とその別当寺である永代寺が並んでいて、冬木町のところには「里俗寺裏ト云」という注記もあります。富ヶ岡八幡宮の富士塚との関連も注目されます。  
本書で、作者は自分のことを「天保十四年[1843] 癸卯八月、深川隠商 松露園礎山覚書」と書いています。このため、①「百八



■江戸切絵図「深川之内」／嘉永3年(1850)

## 富士山御師外川家に泊まった人々(後-3) - 『富士の道の記』の紹介 -

講印曼荼羅」と『富士の道の記』はほぼ同じところに作成されている。②作者は、富士講「全」の先達の金之助と同じ深川である。③生活にゆとりがあって、一定の文芸的素養もあるこの作者は、「隠商」を自称し、隠居した商人のようで、干鯛問屋の主人、またはその周辺の経済的に余裕のある人物〔冬木町の起源は材木商の冬木屋とのことです。周辺に材木商も多くありますので、その可能性も捨てきれません〕であった可能性が高いと思われる、このように推定できると思います。

### 『富士の道の記』の意義

ところで、このような「富士の道の記」が残されていることは、富士山信仰の研究にとって、どのような意義があるのでしょうか。

その大きな貢献の一つは、外川家住宅、特に離れ座敷の建設年代についてです。これまで、建築史の面から、外川家住宅の「離れ座敷」〔裏座敷〕については、明治の初年頃の建立と考えられていましたが、明治2年〔1869〕の売買証文の存在から、外川家の報告書では、幕末頃まで遡るとされてきました。ところが、天保14年〔1843〕夏に御師外川家に宿泊した作者らが泊った場所は「上段の次の間」であったという記述から、既に江戸時代後期には「上段の間」が存在していたことが分かります。

外川家住宅を訪問された方はだれでも、離れ座敷一番奥の一段高くなった上段の間のことを覚えておられることでしょう。こうした特徴的な建築が、これまで考えられていた以前から行われていたことが分かるのです。現在の上段の間とこの記録の上段の間が同じものであるのかは、まだほ

一方、作者の本来の御師は、外川家と道をはさんで右斜め前の仙元坊〔浅間坊〕であると書いています。仙元坊の所蔵史料から、『富士の道の記』と同時代の江戸檀家に関する史料が出てくれば、作者の人名が載っている可能性もあると思われますが、その場合大部分が俗名です。たとえば「礎山」という名が行名であったとしても、記載されている可能性は低いと考えられます。このため、深川周辺の富士講史料の調査・研究も、今後続ける必要があると思われます。



■浅間坊の門



■旧外川家住宅 上段の間

かの諸資料と突き合わせてみなくてはならないでしょうが、外川家住宅離れ座敷の建築年代が、少なくとも2、30年さかのぼる新たな可能性が出てきたのです。

また、一行は御師の屋敷に着くなり、さっそく風呂に入っています。一人ずつではありますが、もうお風呂の設備が用意されていたのです〔風呂場がどこに設置されていたのかも、今後考えてみなくてはなりません〕。夕食の際には、酒が振る舞われます。また、寝る際には、蚊帳が設置されました。このように、現代の民宿や旅館に通ずる快適な接待の仕組みが、江戸時代後期の富士山北麓の宿泊施設に始まっていたことがわかるのです。

記録としての本書は、このように〔お風呂に入ったとか、酒が出たとか、蚊帳があったとか〕一般の古文書からはわからない、富士山に禅定する道者たちの行動を、よりリアルに知ることができるようのも、その強みの一つです。たしかに、本書は記録ですから、フィクションが入る可能性もなしとしません。しかし、各場面で挿入

される歌の的確で自然な入りかたにしても、読む者にその気配をまったく感じさせないのです。

この作者は、当時としてもかなりの文化人で物知りと思われそうですが、お高くとまった所もなく、〔本誌では紹介できませんでしたが〕谷村〔山梨県都留市〕に旧友を訪ねたり、見ず知らずの佐野の富士講の連中と仲良くなって行動を共にしたり、かなりの呑兵衛で、たとえ武士でも勧められれば平気で杯を重ねています。頼まれて、臨時の先達にもなるという気の好いところも見せています。そういった庶民感覚の持ち主でもあります。

このように、読み物として、また、富士山への紀行文の一つとしても優れている本書を、将来是非、全体を翻刻し、近世の紀行文や富士山信仰を研究する人々、また富士吉田周辺の地域の人々にも読んでいただきたいと思っています。

最後になりましたが、掲載のご許可をいただいている新潟大学附属図書館資料公開関係の方々に感謝致します。

〈註〉

※〔岩科小一郎著『富士講の研究』、グラフィア8ページ目に掲載、江戸市中を中心とする富士講の講印と先達名・その所在を、一幅の軸に仕立て上げたもの。天保13年〔1842〕ころ作成と推定〕

# 富士山に祀られた女神

どうぞうじょしんりゅうぞう  
 銅造女神立像

近藤暁子／山梨県立博物館学芸員

高橋晶子／富士吉田市歴史民俗博物館資料調査員



■銅造女神立像(個人蔵／富士河口湖町)

## 概要

本像は文化3年(1806)京都白川家から下賜されたという伝承が残され、かつては富士山中の御座石浅間神社に祀られていたと伝えられています。富士山中に祀られる神仏像は金属製のものが多く、本像もそれに類するものです。銅厚は厚い部分(左足下付近)で1cmと比較的厚めですが、全体的に均一に、細部まで丁寧に仕上げられています。

富士山に関わる女神像は、木彫像では江原浅間神社(南アルプス市)の浅間神像(平安時代)、忍草浅間神社(忍野村)の女神像(重要文化財・鎌倉時代(1315年))が現在確認されているものの中では古く、ほかには江戸時代に制作された作例がいくつか知られています。とりわけ江戸時代には「木花開耶姫」の呼び名が定着し、多くの絵札などにあらわされ、信仰を集めました。

本像のような銅造の女神像は

今まで確認されていませんが、手に宝珠と柵を持つ姿は、江戸時代末から明治初め、19世紀後半頃の制作とされる富士吉田市歴史民俗博物館所蔵の木花開耶姫像や、同時期に多く制作された絵札に描かれる女神像と共通しています。そのため、本像も本来左手には柵を持っていた可能性が高いと考えられます。また、頭部には現在帯状の冠のみが本体から彫出されていますが、それらの像と同様の宝冠を別材で作し、その上に載せていた可能性もあります。

本像の衣の襷の表現などは、こうした絵札に描かれた女神像を参考にしたと思われる部分(正面から見た左右の肩に流れる髪筋の表現や、胸辺の衣の重ねの表現、袴の膝辺の皺の寄せ方など)が多くみうけられます。このようなことから、本像の制作も、絵札が描かれた江戸時代末から明治初めの19世紀後半頃と考えて良いと思われます。



■右側面



■背面



■左側面



■上半身左斜

博物館 Report

富士山に祀られた女神 銅造女神立像



■上半身背面



■頭頂部



■持物



■像底



■台座上

【法 量】

- 本体 像 高：23.3cm
- 髪際高：21.8cm
- 胸 奥：4.5cm
- 腹 奥：5.6cm
- 裾 張：12.0cm
- 台座 幅：15.5cm
- 奥 行：12.0cm
- 高：5.5cm

【品質構造】

本体は、銅製鑄造。頭体および手足、宝珠、柄（前面左右各1、背面中央1。あわせて3柄）まで含んで一鑄とみられる。表面は、顔面や手などの肉身部と、冠、持物に金が残る。また、眉、左右こめかみ付近の毛筋を墨で描く。

【形状等】

方形の台座（二段）に立つ女神像。頭髪は、頭頂前面に頭髪を左右に分かつ線刻を施し、ほかは魚々子を連ねて毛筋をあらわす。総髪にして背面腰で一端束ね、足下まで垂下する。頭部に帯状の冠をつける。服制は、いわゆる十二単（女房装束）に類するものと思われる。袴を

はき、単・打衣・五つ衣・表着・唐衣等（現状で厳密な判別はできない）を重ねてまとい、裳をつける。裳の大腰には左右に懸帯がつけられ、背面から両肩を通り、正面胸前で結び目を作る。

右手は胸前で宝珠を持ち、左手は腹前で全指を捻ずる（現状で持物亡失）。

富士吉田市歴史民俗博物館  
 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご 案 内

- 開館時間／午前9:30～午後5:00（午後4:30迄入館可）
- 休館日／火曜日（祝日を除く）、  
    祝日の翌日（日曜・祝日を除く）、年末年始
- 観覧料／大 人 300 円（団体 240 円）  
    小中高生 150 円（団体 120 円）
- 交通案内／●中央自動車道河口湖 IC より車で10分  
    ●東富士五湖道路山中湖 IC より車で10分  
    ●富士急行線富士山駅より山中湖方面  
    バス15分、サンパークふじ下車



博物館附属施設

御師 旧外川家住宅のご案内

〒403-0005  
 山梨県富士吉田市上吉田3丁目14-8  
 TEL 0555-22-1101  
 観覧料／大 人 100 円（団体 80 円）  
 小中高生 50 円（団体 40 円）  
 ※博物館・富士山レーガードーム館の  
 チケットで入館できます。

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化（変化）したものといわれています。

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 2288-1 TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665

博物館ホームページ URL ● <http://www.fy-museum.jp> E-mail ● [hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp](mailto:hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp)

2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

発行/平成25年3月31日 印刷/K2・ONE